

松任谷正隆の

僕のひとりごと

06

VOL.06 山中湖

僕の作曲の初めての作品のタイトルは「馬」である。

小学校の4年だか5年の時の夏休みの宿題として提出した。

今も手元にあるのだが、「馬が走る。パカッパカッ・・・」みたいな感じ。

今はこの年代でも大人顔負けの研究をする時代なのに、これはもう稚拙というか、

こんなもの書いたやつがいまだに音楽をやっていいの？

という情けない気持ちになる。

ここに出てくる馬は山中湖の当時のアトラクションのひとつで、

1時間いくらかで馬方さんが飼っている馬に乗せてくれるというもの。

懐かしいなあ。

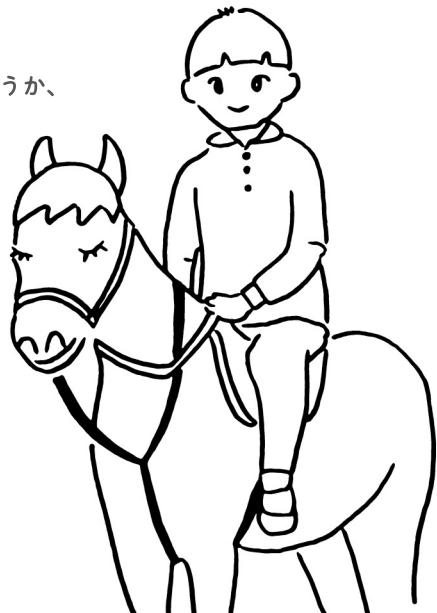
作曲2作目は「快速モーターべーと」。

これも恥ずかしい内容だから書くことを控えるが、

山中湖の遊覧モーターべーとを指す。

つまり、山中湖の別荘での毎日がいかに自分にとって非日常だったのか、

ということを表しているのだと思う。



さて、この別荘、いつ建てられたのかは分からぬが、祖母の、いやたぶん祖父のものであり、

女を別に作るような祖父だったためか、祖母が我が物顔で使っていた。マザコンだった僕の母親は当然一緒。

そうなるともれなく子供達、つまり我々兄弟も一緒ということになる。

夏休みになると僕たち兄弟、母、そして祖母でこの別荘に行くのはルーティンだった。

そしてスケジュール最後の方に父が週末を利用してやってきて2日間くらい一緒に過ごす、というのもルーティン。

山中湖は本当に空気が良くて、別荘に降り立った途端にひんやりして、肺がスープと綺麗になっていくのを毎回感じた。

地面も赤い火山岩でじゃりじゃりしており、高山植物がやたら綺麗で、

こうしてこれを書いているときもあの気分が蘇ってくる。

別荘から歩いて数分のところに祖父が作ったゴルフ場があり、そんないきさつからこの地を紹介されたのか、それとも誰かと住むことを考えたのか、いずれにしてもそのどちらかだろう。

記憶にある最初の方は周りには誰も住んでいなかった。

かろうじて少し下の方に女優の淡島千景さんの別荘が

あつたくらいで、見事に別荘感満載だった。

母屋は当時でも珍しくなっていた茅葺き。思いだしてみると外壁にも植物の皮が張り付けられてあったように思う。

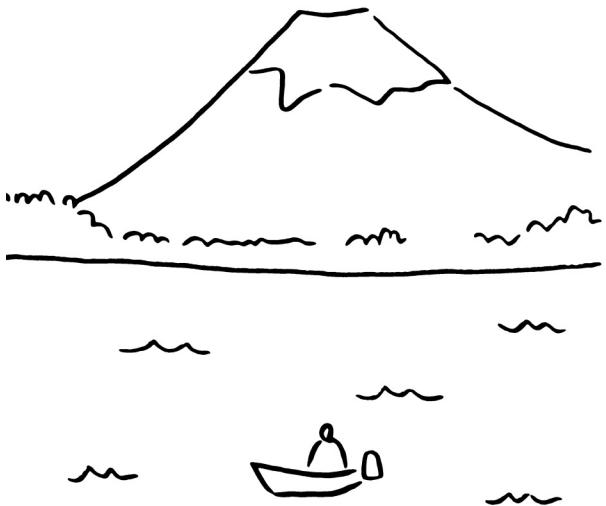
ガスが来ていたかどうかは不明だが、

夕方になると祖母と母で薪を燃やしご飯を炊いていた。

お風呂も最初の頃は薪だった。裏庭には烟があり、

ここで祖母はインゲンを育てていた。

そういえばトウモロコシもトマトもあったっけ。



毎朝、馬方さんが馬を連れてやってきて、僕の朝は始まった。

馬方さんと馬の折り合いが悪いときもあって、僕は一度振り落とされそうになったこともある。

頭から落ちいたらきっとヤバいことになっていただろう。夜は広めの部屋で全員布団を敷いて寝た。

虫対策に蚊帳を張ったかどうか、までは定かではない。寒いくらいに涼しかった。

毎日毎日がほぼ同じ事の繰り返し。数日に一度は旭が丘にモーター舟に乗りに行くくらい。

それでも子供時間からすれば充分にエキサイティングだったのだろう。

時が経ち、30年ほど前に祖母が亡くなったのをきっかけに従兄弟が別荘は処分したと聞いた。

心に大きな穴があいた。子供の頃にしか行ってないのになぜなのだろう。

最近、その従兄弟が山中湖方面に行くというので、別荘跡はどうなっているのか見てきてくれ、と頼んだ。

写メールが送られてきて驚いた。建物こそなくなっているが、

そこは何も再開発がされておらず、昔のままだ。聞くと、そこは借地権を買う方法だったらしい。

今は密かにそこを再度借りることを考えている。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy

